

「2024年ワーキング・スタディ・ツアー」に参加して

連合本部 杉山 寿英

サバイディー、コイスー杉山！ 本ツアーに昨年参加した前任者からは「絶対参加すべき、人生観が変わるよ」と言われました。しかし、日程を見た瞬間、正直なところかなり長い（すみません）と感じてしまったのですが、いざ参加してみるとあっという間の8日間であり、前任者の言葉に嘘はありませんでした。



訪問先の学校からは大勢の生徒や教職員の皆さんが我々の到着を今か今かと待ち構えてくださり、申し訳ないくらいの歓待や感謝の意が寄せられました。

ホンガム村の小学校ではサッカー組と折り紙組に分かれて生徒たちとのコミュニケーションをはかりました。私は（気づいたら）折り紙組でしたが、子どもたちが嬉しそうに次々と紙飛行機を飛ばす姿は微笑ましく、懐かしさすら感じたほどでした。

また、CSAが寮の運営をしているサンティパープ高校の男子生徒寮を見学しました。お世辞にも広いとはいえない部屋は教科書や私物であふれており、男子トイレは4つあるうちの2つが故障して使用できないなど、環境は決して良いとはいえませんでした。しかし、寮訪問の3日前に行った高校寮卒業生との交流会において、勉強や寮での生活は大変だったかとの質問に対して、「非常に大変だった。でもCSAの支援がなければ今の自分はない。CSAにはこれからも引き続き後輩たちのためにも支援を続けてほしい」と懸命に訴えていた姿は非常に印象的でした。

卒寮生は、国費留学や政府高官、医師など、ラオスを担う人財として活躍しているとのことですが、これはCSAの支援活動がいかに現地の人々にとって有益であることを示しています。なにより本ツアーを通じて各構成組織および地方連合会からの善意で成り立っている「連合・愛のカンパ」が、有効かつ適切に活用されていることを体感できたことは連合職員としても大変貴重な機会となりました。

人生初のラオスを見るものすべてが衝撃でした。宿泊先から出発してほどなくすると街の景色は一転。街中ならいざしらず、周辺には何も無い場所で、しかも平日の日中にもかかわらず、子どもが一人で店番をしている姿を何度も目にしました。タイ・バンコクでは豪華な高層ビルが乱立する中、そのすぐ下にはスラムが点在するなど経済格差は明らかでした。タイ大使館からの説明では、貧困層の月収はバンコク内に展開している某大手回転寿司の3皿にすら届かないとのことでした。また、教育スポーツ省やJILAFバンコク事務所からは、教育面への予算措置はどうしても後回しとなり、教員の確保はもとより教員の質の低下は避けられないとの報告がありました。

車窓から見た店番をしていた子どもたちやスラムで育った子どもたちは満足に学校に通えないままこの先も親の手伝いをするのだろうか、あの子どもたちが学校に通えるにはどうすればいいのか。己の力などたかが知れていますが、今回の貴重な体験を自分一人だけのものとせずCSA活動と支援の輪を広げることを「宿題」としながら帰国の途に就きました。

最後になりますが、CSA事務局をはじめ、この度のスタディツアー参加への機会を与えて下さ

った関係者の皆様、そして不慣れな団長を全力で支えて下さった参加メンバー、さらには準備段階から快適な運営を担って下さった山崎事務局長に心から感謝申し上げます。コプチャイライラーイ！

スズケングループ労働組合連合会 草次 祐治

はじめにCSA事務局・関係者の皆さま、視察への準備やご配慮等いただき厚く御礼を申し上げます。今回のワーキング・スタディ・ツアーを通じて、CSAの活動内容および現地のリアルな生活環境や教育環境を知ることができました。このようなチャンスをいただけたことに大変感謝しております。

2024年ワーキング・スタディ・ツアーを通じて印象に残ったことを二点、報告いたします。

一つ目は、サンティパーブ高校のCSA寮訪問です。ラオスの中でも優秀な学生が多くいる学校で、出会った生徒は皆さん積極的で前向きでした。ラオス語だけではなく、英語や日本語を使い一生懸命スピーチをする姿に大変感銘を受けました。と同時に自らの拙い片言のラオス語と英語に歯がゆさも感じました。その後、人生の節目や繁栄、旅の安全等を祈願する「バーシー」と呼ばれる儀式が行われ、学生一人ひとりがお祈りをしながら腕に紐をつけていってくれました。とても神秘的な体験をすることができました。

あっという間の二時間でしたが、大変有意義な時間となりました。

二つ目は、ホンガム村の小学生たちとのサッカー交流です。寄贈品としてサッカーボールをプレゼントしたこともあり、せっかくだから試合をしようという流れになりました。当初サッカーをやる



予定ではなかったため、CSA団員一同スーツに革靴という悪条件ではありましたが、ラオスの地で子供たちと無我夢中でボールを追いかけて、気づけばみんな泥まみれになっていました。子供たちの無邪気で楽しそうな姿を見ながら、一緒に汗をかき、かけがえない時間を共有することができました。ラオスではサッカーが一番人気のあるスポーツのようで、低学年でも上手な子が多いことに驚きました。

最後に、今回の経験やCSAの活動を組織内外へ発信するとともに、多くの事に挑戦していきたいと思います。

すかいらくグループ労働組合連合会 松森 識裕

はじめに、今回のワーキング・スタディ・ツアーに参加させていただき、CSA事務局の方々、関係者の皆さまに心より感謝申し上げます。

このツアーに参加が決まったときは、海外への支援活動はもとより国内の支援活動にさえ関心

がありませんでした。また、ラオスという国が東南アジアの国というだけで、どこにあるのかもわからない状態でした。

ラオスという国のことや、支援活動で救われている人々がいることを、実際に現地を訪問し支援を受けた方と直接話をすることで感じることができました。

CSAが全面的に支援するサンティパーブ高校生寮の卒業生は各方面で活躍しており、卒業生との懇親会では、CSAのおかげで今の自分がいると感謝の言葉をいただきました。

CSAの支援を受けることができた彼らは、明るい将来がありますが、すべての子供に支援がいきわたっているわけではありません。ラオスにはナイトマーケットで店番をしている子供や、メインの通りからはずれた路地で、多くの観光客の賑わいに埋もれながら物乞いをしている子供がいます。教育物資の支援がまだまだ足りない、また物資の支援だけでは解決しない問題も多くあることが現地を訪問することでわかりました。

ラオスに興味を持ってもらうことが延いてはラオスの子供たちの支援にもつながるということから、ラオスという国がどういう国なのか、経験した内容を仲間に伝え、ラオスに興味をもってもらう人を増やすことも今回のツアーの目的の一つでした。

組織内で経験した内容を共有し、一人でも多くの人にラオスという国に興味をもってもらい、冒頭で出した「ラオスという国が東南アジアの国というだけで、どこにあるのかも知らない」ではなく、ラオスに行ってみたい、CSAの活動を支援したいという人を増やしていこうと思います。



Oriental Land Friendship Society 佐橋 翔太

まず初めに、今回このような大変貴重な機会を頂けたことに感謝を申し上げます。

今回メインの訪問先となったラオス、そしてタイは当然名前を知ってはいたものの、これらの国を含め東南アジアに行ったことはなく、どのような国か、どのような国民性なのか、どのような暮らしをしているのか、全く未知の体験となりました。

恥ずかしながらCSAの活動もこれまで知っていたわけではなく、日本が教育支援をしていることは何となく耳にしていたものの、それがどのように行われているのか、現地でどのように活用されているのか、これまで興味が無かったのが正直なところでした。

いざラオスに降り立ってみると、首都・観光地としての煌びやかなラオスと、その裏で必死に毎日を生きているであろう、決して裕福ではない国民とでそのギャップ感に驚きました。多くはないものの露店に子供たちが立っているのが半ば当たり前になっている中で、教育は受けられているのか、この子供たちが本当にやりたいことは何なのか、非常に気になりました。

サンティパーブ高校で一人の寮生に寮の案内をしていただきました。サンティパーブ高校は学



業優秀で知られるものの、寮の環境はお世辞にも良いとは言いがたく、ベッドに腰かけ狭い机に教科書や参考書を積み上げながら、狭い空間で勉強をしています。お手洗いも詰まっており悪臭を放ち、自炊もガスはなく薪から火を起こして作るとのこと。その中で未来を見据えたくましく勉強し、ラオスという国を盛り上げようとしている学生たちを見て、少しでも役に立つ支援をしたいと感じる瞬間でした。

一方で、今回の訪問先の中で一番大きな驚きだったのは、ラオスでの日本国大使館訪問で書記官の方が仰っていた、“ラオス（の国民）は支援されることに慣れきっている。自立させていく事も必要”という話でした。ツアーの冒頭でこの話があったからか、多少バイアスがかかっていたものの、この後の訪問先で何度かそれを体感することとなりました。支援のあり方も、物資を届けるにとどまらず、教育として、ひいては国が持続的に発展できるように、簡単なものではないことを実感いたしました。

7泊8日、非常に充実したメンバーで有意義に過ごすことができました。スタディツアーは是非多くの方にご参加いただき、その目で見て、聞いて、体験いただきたい内容であったと感じております。ありがとうございました。

シンフォニアテクノロジー労働組合 森本 貴 幸

このスタディツアーに参加させていただき自分にとってほんとに参加してよかったと感じました。今後の活動を行う上でもそうですが何より自分の知らない文化に触れ、また他国の課題について考える機会をいただき、自分自身考え方など大きく変化しました。

また、今回の旅で2点のことがとても印象的でした。1つ目に印象に残ったのは、ラオスの実態についてです。特に在ラオス日本国大使館の中野公使の話が印象的でラオスの国民性について中野公使がおっしゃっていた「依存体質」についてはそのほかの訪問先などで垣間見え、産業など様々な発展の妨げになっていると感じ、この問題がラオスの本質的課題なのだと感じました。またJILAFの関口さんに話していただいた教育問題に対して「子供の教育」だけでなく「親の教育」が必要といった話もとても興味深かったです。教育を受けてこなかった親世代は教育の必要性に対して認識も低く子供の持っている可能性をつぶしてしまっているように感じました。ラオスにはまだまだ課題が多く残っているがその反面今後の「のびしろ」がとても多く魅力的で素敵な国だと感じました。

もう1点印象に残ったのは、「繋がり」でした。サンティパー寮の卒業生との交流会の席で「皆さんの支援があったから今の幸せがある」といった話を聞いたのは本当に感動し、また同時にCSAを通しての寄付といった形で少しでもみんなの役に立てていることに喜びを感じました。今回前半の通訳を担当していただいたヌーソンさんやJILAFの事務員の方など支援を通してつながった方々が今も支援先の方と仕事などを通じ関係を継続しているといった点もとても興味深かったです。

スタディーツアーを通し、他国支援の必要性、重要性を改めて認識するいい機会となりました。自組織でも少しでもこの重要性を伝えられるように取り組んでいきたいと思えます。

また最後になりますがこのスタディーツアーがとても楽しく帰るころには「も終わってしまうのか」とさみしく感じたのは山崎事務局長や杉山団長をはじめ皆さんに本当に良くしていただいたおかげだと感じています。

今回ともに参加した皆さんとの「絆」もこれからも継続させていきたいです。

引き続きよろしくお願ひします。

コプチャーライラーイ！



JAM東京千葉 東京計器労働組合 久保 徹

今回、ワーキング・スタディー・ツアーに参加させていただき、人生初のラオス及びタイでの貴重な体験をすることができ、CSA事務局の方をはじめ関係者の皆様に深く感謝いたします。

正直、CSAの活動について全く知識がない状態だったので、過去の活動や参加報告書を読み、理解するところから始めました。その中で小学校建設補修事業と高校生の学生寮運営支援等の活動を行っていることを知りました。

今回のツアーで印象的だったことの一つ目は、サンティパーブ高校の寮卒業生との交流会で母国語だけでなく英語やスペイン語、日本語と数か国語を話すことができ、卒業後に省庁勤務や留学などとても優秀な方ばかりでした。また交流を行った全員がCSAの支援にとっても感謝しており、長年のサンティパーブ高校の寮支援が卒業生及びラオスの発展に寄与しているのだと感じられました。また後日、サンティパーブ高校へ訪問し寮生活の部屋や調理場など実際に見せてもらい限られたスペースで教科書やノートを広げて勉強している姿などとても印象的でした。

二つ目は寄贈したホンガム村の小学校へ訪問し、小学1年生と2年生にあたる子供たちと折り紙をしたり、グラウンドでサッカーをしたりと会話はできませんでしたが、楽しそうに折り紙やサッカーをしている子供たちと交流ができたが、家庭の事情で卒業まで通えない子供もいると聞き、何か違う形での支援ができないか考えさせられました。

最終日に訪問したタイ・バンコクは、私が想像していた以上の都市で高層ビルや行きかう人々の多さにびっくりしました。ただ、在タイ日本国大使館でタイの少子高齢化や都市部と地方の経済格差、難民や移民の貧困問題など、いろいろな問題を抱えていることを知り東南アジア全体が発展で



きるような支援の形があればと考えさせられました。

全体を通じてとても貴重な経験ができ、今まで知りえなかったことを知ることができました。今回の経験をJAMの組合員に広めることができればと思います。また、積極的にCSAの支援活動に協力していきたいと思っています。本当にありがとうございました。

I H I 労働組合連合会 相馬支部 穂積 聡

まず初めに今回のスタディ・ツアーに参加させていただき、貴重な体験をすることができました。CSA事務局の皆様はじめとする関係者の方々には感謝いたします。

CSAの活動としては、中古衣類を送る活動がありますが、私自身も中古衣類を提供、回収の活動を行っていましたが、その他の小学校建築や、高校生寮などの支援をしているのはニュースなどで見る程度でした。ラオスも行ったことはなく期待と不安の中、出発しました。

スタディ・ツアーの中で特に印象的だったこと挙げると、まず一つ目に、サンディパーブ高校卒業生との交流です。ラオスの母国語のラオ語も英語も全くできなく不安でしたが、グーグル翻訳を使用し、身振り手振りで何とかコミュニケーションをとることができました。その会話を通して、卒業生の皆さんが非常に優秀なことがわかりました。ほぼ全員が進学し、日本へ国費留学している人や、就職先も医者や国の機関に勤務している人が多数いて感銘を受けました。卒業生の皆さんが、CSAの支援で勉強することができ今の自分たちがいる、引き続き後輩たちにもこのような経験をさせてあげたいので引き続き支援をお願いしますとの声もあり、CSAの活動が皆の人生を支えている事を感じることができました。

二つ目に、CSAが二校目に寄贈したホンガム村小学校での小学生との交流です。宿泊先から一時間程度車を走らせた先に、平屋づくりの建物があり、その近くの大きな樹の下の日陰になった場所に、サバイディー（こんにちは）大勢の在校生たちが出迎えてくれました。校長先生との意見交換の後、生徒たちにプレゼントとして、勉強ノート、折り紙、サッカーボールをプレゼントしました。コプチャイライライ（ありがとうございます）満面の笑みのあいさつ、本当にうれしそうでした。生徒たちとの交流では、折り紙で紙飛行機を飛ばしたり、校庭でのサッカーでの交流をしたりしました。突如CSA代表（9名）VS在校生（約30名）との対決が始まり、結果引き分けでしたが思い出に残る交流ができました。

ラオスでは小中学校に通っても、家庭の事情でドロップアウトしてしまうこともあるとの説明も聞いていますので、CSAの支援が未来の子供たちに重要であると実感しました。

そのほかにも様々な場所に訪問をさせていただき、貴重な体験をさせていただきました。このスタディ・ツアーを通じ、CSA活動を引き続き支援していきたいと思うのと、労組内にも周知した



いと思いました。

最後にお世話になりました。杉山団長、山崎事務局長、久保事務局次長、今回参加されたメンバーと貴重な時間を共にできたことに感謝します。ありがとうございました。コプチャイライライ！！

三菱重工グループ労働組合連合会 清水 孝 則

今回2024年CSAワーキング・スタディ・ツアー（以下、WST）に参加させていただき、CSAの活動やラオス・タイの文化に触れる貴重な体験をさせていただいたことに対し、CSA事務局の皆様をはじめとする関係者の皆様、そして現地で受け入れ等をしてくださった方々に心より感謝申し上げます。

WSTに参加する以前までのCSAの活動の印象は、「救援衣類を送る運動」の印象が強かったのですが、今回、実際に現地に足を運ばせていただき直接自分の目で見て、現地の方々の声を聞くことにより、「救援物資事業」の支援活動のみならず、「小学校建設・補修事業」「教育支援事業」とCSAが幅広く活動していること、そしてその活動がラオスの現地の方々にとってどれだけ必要とされているかを理解するとともに感謝されていることを知れる機会となりました。

WSTの中で特に印象に残ったことが2点あります。

まず1点目は、CSAが2番目校として寄贈したホンガム村小学校を訪問したことです。出迎えてくれたのは、小学1年生と2年生、そして先生方でした。校長先生との意見交換の後、CSAからのプレゼントとして文房具、折り紙、サッカーボール等を受



け取る時の子どもたちの満面の笑顔が今でも忘れられません。また、子どもたちと交流する機会もあり、折り紙で紙飛行機を折って、受け取る時にラオス語で「コプチャイライライ」と笑顔でお礼を伝える子どもたち、そして、一緒にサッカーをすることもできたことが楽しかったです。日本とは異なり、近隣に小学校があることが当たり前ではなく、遠く離れた学校に通う小学生もいる実情からCSAの「小学校建設・補修事業」が現地の子どもたちにとって、大きな役割を果たしていることを認識することができました。

2点目は、サンティパーブ高校CSA寮卒業生との交流会および高校生寮視察です。卒業生の中には、政府機関で働く方や医師、弁護士をめざして勉強している方等、ラオス国内で重要な仕事をしている卒業生がいます。卒業生たちは、「CSAの支援がなければ高校に進学できなかった。今こうしていただけるのもCSAの支援のおかげです。」と感謝の言葉を伝えてくれました。また、高校生寮視察では、寮生および先生方から熱烈な歓迎を受けました。寮生からも「われわれの第2の両親」「ご支援を一生忘れない」「頑張っ て勉強して国、行政のために貢献していくことを誓う」等の感謝の声を聞くとともに、寮の部屋を見学させていただくと4人部屋で生活しており、決して学びやすい環境ではないにもかかわらず、日夜懸命に学んでいる様子がうかがえたこと、CSAの支援が近い将来ラオスを背負う立場で活躍する人材育成に繋がっていること、加えて、活動を継続することの重要性を実感できました。

最後になりますが、今回のWSTを体験して学んだことを一人でも多くの仲間に伝えて理解を広め、活動の継続に尽力していきたいと考えます。

東亜道路労働組合 松本 崇



ご安全に、先ず初めにワーキング・スタディ・ツアーに私自身初めての参加となり、CSA事務局ならびに関係者の皆様方へ厚く御礼申し上げます。

弊労働組合では、コロナ禍前まで救援衣類を送る運動をおこなってまいりました。産別（基幹労連）を通して学校建設や移動図書館を寄贈する等の取組みには理解してましたが、CSAの活動としてはお恥ずかしい限りでありました。本ツアーを通して、CSAの取組みを現地で体験・確認して理解を深められればとの想いで参加させていただきま

した。CSAの活動3本柱は、「救援物資事業、小学校建設・補修事業、教育支援事業」であります。救援物資事業においては、中古衣類を送る運動が見直されたのはご承知の通りであります。今回のツアーでは、「小学校建設・補修事業、教育支援事業」を中心に8日間にわたり身をもって体験して参りました。

ラオス教育スポーツ省局長、県教育スポーツ省局長との面談において、ラオスの教育は国家予算の18%であるが、コロナ禍で一部の学校では職員不足により閉校中であるとのこと。更にコロナ禍でオンライン授業も併用したが、特にコロナ前よりインフラ財政局面でラオス貨幣（キープ）価値が半減していることから諸事情で教育を受けられない家庭も出てきているとのことであった。両

局長ともに「CSAからの支援があって子供たちの教育がなされている」と強調する報告があった。一方で在ラオス日本国大使館での訪問では、一等書記官より「ラオスは外国依存の体質が強い国である」と説明があり、ラオスの両局長からの発言に思い当たる節があると実感しました。

小学校視察ではホンガム村にある1996年CSA寄贈2番目校を訪問し、低学年の子供達と折り紙体験と称して紙飛行機を作成し飛ばし、寄贈したサッカーボールで思う存分に広いグラウンドでサッカーを楽しみました。CSAチームVS子供達による戦いの行方は0対0で幕を閉じましたが、何ものにも代え難い体験をしました。

サンティパープ高校生寮では到着後、壮大な歓迎セレモニーで出迎えられ、副校長先生よりCSAの支援を受けて寮生が勉学に励んだ結果、勉学を競う県大会へ8人の生徒が選抜され先生方は誇りに思っているとのことであった。寮生の代表2名より挨拶があり、「CSAによる寮を設立してくれたことへの感謝」「CSAは私たちの第二の両親と思っている」「ご支援を一生忘れない」「引き続き寮生として勉学で貢献していくことを約束する」と挨拶があり非常に感銘を受けた。その後、県大会に選抜された学生よりスピーチがあり、中でも日本語を話せる学生より私たち団員へ「皆様のご健勝をお祈りしてます」と伝えられ、改めて勉学に励むことはもとより向上心の高さに驚きと感銘を受けました。

結びに今回、大変貴重な体験や経験を言葉にできないぐらいさせていただきました。改めてCSA運動3本柱の水平展開ならびに活動の意義を組織内で展開していきます。杉山団長、山崎事務局長をはじめ素晴らしいメンバーである仲間と過ごせた時間に感謝申し上げます。

ありがとうございました。ご安全に…